

明治14（1881）年、静岡で生まれ。静岡中学から第一高等学校（獨法）へ進み、京都帝大法科を首席で卒業し、明治38（1905）年内務省へ入った。地方局勤務の後、奈良・神奈川・三重の各県事務官を経て、明治44（1911）年土木局道路課長として本省へ戻った。

大正2（1913）年、万国道路会議（ロンドン）の出席をかね、1年間欧米へ出張。途中、ドイツにおける自治体経営の理念と実際から多くを学ぶ。帰国後は、道路課長として道路法制定に努力し、また東京市区改正委員会幹事として、同事業の総括にあたった。

大正7（1918）年、内相・後藤新平により新設された内務省大臣官房都市計画の初代課長に就任した。以後、池田は後藤に従って官途を上る。その第1の仕事が、同年の都市計画調査会による都市計画法・市街地建築物法の法案審議であった。池田は両法案を起草し、当時理解する人の少なかった「都市計画」の概念を定型化し、立法化にこぎつけた。

大正9（1920）年、社会局（厚生省の前身）の創設とともに初代局長に就任し、住宅問題などに着手したが、3カ月後、東京市長に選出された後藤新平に従って、同市助役に転出し、後藤の「8億円計画」ともいわれる「東京市政要綱」を立案した。また大正12（1923）年の

関東大震災後は3たび復興院総裁・後藤新平のもとで、計画局長として帝都復興計画に取り組んでいる。大正13（1924）年、池田は京都府知事に任せられ、2年後、神奈川県知事に転じた後、昭和4（1929）年退官し24年近い内務官僚としての生活を終えた。

退官後は、大阪商大（現在の大阪市大）の市政科を中心に専修大・京都帝大などで教鞭をとった。また、従来から関係の深かった都市研究会や、東京市政調査会の役員として機関紙を通じて健筆をふるい、都市問題全般の研究者・評論家として活躍した。昭和10（1935）年頃より、国策関係の研究・啓蒙活動に力を注ぐようになる。

晩年、軍の要請により日華事変下の上海における新都市建設計画のために渡支を重ねたが、これが彼の最後の仕事となり、昭和14（1939）年、57才で死亡した。

池田宏は、生涯に241件の著作を残しており、その領域は、地方経営・地方自治、都市計画・都市経営、社会政策、社会教育・国策関係など多岐にわたる。

